一宮市博物館だより

No.65 2022.3

もくじ

コロナ禍での連続講演会「尾張平野を語る25」の開催について……1
博物館アルバム（令和3年度）……2～7
登録有形文化財（建造物）の新登録　瑞芳院本堂及び庫裡……8
史料紹介「御巡見御触留記」……9～11
令和４年度企画展
「国登録文化財　葛利毛織工業工場とのこぎり屋根」…12～15
令和4年度　展覧会・催し物のご案内……16

コロナ禍での連続講演会「尾張平野を語る25」の開催について

「尾張平野を語る」は、自然・考古・民俗・歴史・美術工芸などさまざまな分野の講師を招き、尾張平野の歴史と文化を紹介する連続講演会です。長年にわたり毎年開催してきましたが、昨年度は新型コロナウイルスの蔓延により開催を断念しました。今年度は、事前申し込みとして参加人数を20名に制限して館内で開催し、オンラインで同時配信をすることで多くの方に視聴していただくことができました。25回目となった今年度のテーマは「トキメク！古墳時代」で、3名の考古学研究者に古墳時代の〝ときめく〟お話をしていただきました。

講演会のオンライン配信は初めての試みで、開催を決めた当時、当館の通信環境は不十分な状態でした。万全の準備をしたつもりでしたが、いざ本番となると毎回予想外のトラブルが生じ、参加者の方々にはご迷惑をおかけするような場面もありました。それでも毎回80名前後の方が日本各地からオンラインでご参加くださいました。また会場参加の申込はコロナ禍にも関わらず各回満員となり、改めて今回のテーマである「古墳時代」への興味関心の高さを窺い知ることとなりました。

今回初めてオンラインで開催し、その需要の高さ、注目度を実感することとなりました。全国から当館の講演会を見てもらえるメリットも大きいと感じています。次年度には通信環境が改善する予定ですので、拙いながらも今後も継続してオンライン開催を実施していければと思います。

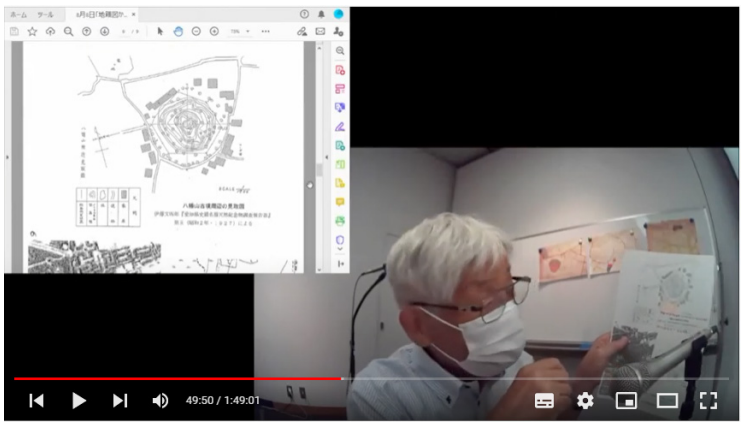
（学芸員　瀧　はる香）

●8月8日（日）
「地籍図から見る古墳の姿」
伊藤秋男氏（南山大学名誉教授）

●8月15日（日）
「3世紀ストーリー・井泉での誓い
―古代葉栗中島郡の原風景を求めて―」
赤塚次郎氏（NPO法人古代邇波の里・文化遺産ネットワーク理事長）

●8月22日（日）
「古墳を活かす～楽しい古墳の歩きかた～」
中井正幸氏（岐阜聖徳学園大学非常勤講師）

※各講演会のQRコードから講演会の内容がYouTubeでご覧いただけます。



８月８日　伊藤秋男講師
オンライン配信の様子

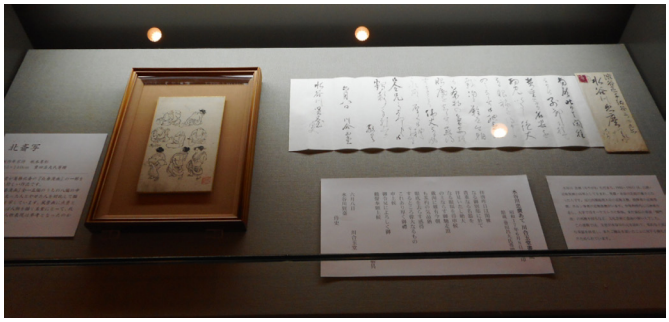
所蔵品による企画展「川合玉堂 水の表現」

令和3年4月17日（土）～5月16日（日）

一宮市博物館が所蔵する川合玉堂の作品から、情緒あふれる風景画や鵜飼の作品など、豊かな水の表現が感じられる作品を中心に紹介しました。

川合玉堂は、明治6年、現在の一宮市木曽川町外割田に生まれ、8歳の時に岐阜へ移りました。その後、絵の修行のため18歳で京都に、23歳で東京に転居すると、円山派や狩野派の画法を融合させ、日本画家として大成しました。戦後は、多摩川上流の御岳で豊かな自然に囲まれて制作に励み、昭和32年、83歳でその生涯を終えました。川のそばで若き時代と晩年を過ごし、その作品には多彩な水の表現が見られます。本展では日本画20点（軸18点、額装2点）のほか、初出品となる北斎漫画の模写と、書簡（昭和17年、水谷川忠麿あて）もご紹介しました。

（学芸員　杉山章子）



所蔵品による企画展「筧忠治」

令和3年6月5日（土）～7月4日（日）

筧（かけひ）　忠治（ちゅうじ）（1908―2004）は、一宮市萩原町に生まれました。同市小信中島で機屋を営む家で幼少期を過ごし、9歳の時に名古屋に転居しました。高等小学校卒業後、愛知県測候所（現名古屋気象台）に勤めながら名古屋洋画研究所でデッサンを学び、画集を通して西洋の美術に影響を受けました。その後は自画像などを独学で描き続け、1949年（昭和24）の中部日本美術展に、長年にわたって母を描いた《虫眼鏡を持てる老母》を出品し、衝撃的なデビューを果たしました。しかし、その後は公募展に出品するも落選に気落ちして沈黙、画壇からは離れて花や野良猫の連作などを描きました。定年退職後になって仲間と展覧会をするようになり、1998年（平成10）に刈谷市美術館で、2000年（平成12）に一宮市博物館で特別展が開催され注目されました。一宮市での筧さんの作品の展示は、2009年の一宮市三岸節子記念美術館での特別展以来、久しぶりのこととなりました。

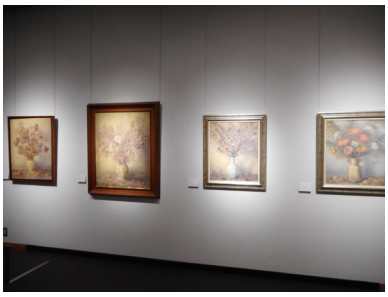
今回は、これまで収集してきた作品に新たに寄贈いただいた作品を加え、晩年まで描き続けた自画像、10年もの間筆を入れ続けた母の肖像画の大作、繊細なリトグラフ、日記のように日々描いていた花や迫力あるノラのシリーズなどを展示しました（油彩9点、水彩1点、素描17点、版画10点、そのほか自画像のペン画と花の板絵多数）。また、ラウンジには、実際に用いていた机やイーゼル、絵の道具を並べ、アトリエを再現しました。濃密な作品群とともに、生前の制作の雰囲気も楽しんでいただけたのではないかと思います。

（学芸員　杉山章子）

母の肖像画の大作と自画像の連作

ノラの連作

アトリエの再現



新収蔵品を含む花の連作

夏季イベント「博物館で夏祭り！」
令和3年7月17日（土）～8月31日（火）

平成29年度から開催し好評である「博物館で夏祭り！」を今年度も開催しました。

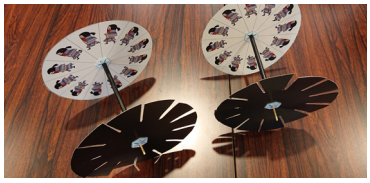
子どもたちに博物館のことを楽しみながら知ってもらうため、「ワークシートで博物館探検」と題し、クイズを解きながら博物館の地図を完成させる「博物館マップ」をはじめ、「一宮市博物館すごろく」や館内に隠れているキャラクターを探す「みつけて！どきどきフレンズ」など様々なワークシートを用意しました。また、常設展示室に小学生にも分かりやすい展示説明を設置するほか、子ども向けの案内映像の放映も行いました。

工作イベントとして、すき間からのぞくと絵が動く不思議な円盤が作れる「アニメーションをつくろう～おどろき盤（フェナキストスコープ）～」や、特別展示に関連して横井庄一さんをまねてクラフトバンドでかご編みを体験する「かごを編んでみよう！」のほか、身近な材料を用いた織り機でコースターを作る「手づくり織り機で織物体験」を開催しました。

昨年に引き続き、博物館・三岸節子記念美術館・尾西歴史民俗資料館の連携企画として、3館を巡ってスタンプを集める「いちのみやミュージアムズ　3館deスタンプラリー」も開催し、多くの子どもたちが参加してくれました。

（学芸員　吉川ひとみ）

ワークシート


工作イベントのおどろき盤

織り機を作る参加者

特別展示「横井庄一さん 絵本原画とグアム島生活資料」
令和3年7月17日（土）～8月15日（日）

「博物館で夏祭り！」の催し物の一環として、一宮市在住の亀山永子さんが令和2年に発行した切り絵絵本『よこいしょういちさん』の原画とともに、アルミニウムの水筒を改造した食器や自作の衣服など、横井さんがジャングルで手作りし使用していた道具を展示しました。

大正4年、愛知県海部郡佐織村（現愛西市）に生まれた横井庄一さんは、名古屋で洋服仕立業を営んでいましたが、昭和16年に2度目の招集を受け、満州に派遣されました。その後、昭和19年、グアム島に移動になるとアメリカ軍の激しい攻撃にさらされ、ジャングルに隠れることになりました。昭和20年には日本兵による抵抗も終息し、8月15日、終戦を迎えますが、横井さんは昭和48年に発見されるまで28年もの間ジャングルで暮らしました。帰国時には、「恥ずかしながら生きながらえて、帰ってまいりました。」と語り、人々に戦時中の教えを思い出させました。横井さんが生活していたほら穴からは多数の生活道具がみつかり、のち名古屋市博物館に寄贈されました。

本展示では、ギャラリーで絵本の原画25点により横井さんの生涯をたどった後、特別展示室で名古屋市博物館より借用した生活道具21点をご覧いただきました（加えて、館蔵の戦争関連の資料3点と、亀山さん所蔵の横井さん関連の資料2点も展示）。夏休み中の開催のため、子供向けに展示の高さを低くし、解説文には全てふりがなを入れました。島の限られた物資に様々な工夫を凝らして生み出された道具からは、様々な思いや情報が伝わったのではないかと思います。

またラウンジでは、CBCテレビが前年11月に放送した「残留日本兵　横井庄一の戦争　恥ずかしながら」のビデオ25分を終日放映しました。番組には、帰国当時の横井さんの姿など貴重な映像が含まれ、多くの人が観覧していました。

7月25日（日）と8月1日（日）には、作者の亀山さんによる絵本の朗読会を行いました。毎回盛況で、25日は定員の20名を超えたため、10時からと11時からの2回実施しました。展覧会期間中、受付にて絵本を委託販売し、90冊の売り上げがありました。

親子での来館のほか、横井さんが日本に帰還した当時を知る高齢者の来館も多く、中には親子三代で来館する姿も見られ、幅広い層にご覧いただくことができました。CBCテレビのニュース番組や中日新聞尾張版での紹介の効果もあり、期間中3,886名もの方にご来館いただきました。

（学芸員　杉山章子）

グアム島で作られた衣服

絵本原画の展示

作者の亀山さんによる絵本の朗読

企画展「妙興寺文書の世界」
令和3年10月16日（土）～11月14日（日）

博物館に隣接する臨済宗妙心寺派の妙興寺には数多くの寺宝が伝えられています。博物館では、これまでにも企画展・特別展を通して妙興寺の寺宝を展示・紹介してきました。今年度の企画展では日本中世史研究者の間では有名な重要文化財「妙興寺文書」を展示・紹介しました。

重要文化財「妙興寺文書」とは、妙興寺に伝わった五百四十九通の文書群の総称です。主に寺領の変遷を伝える寄進状・売券・坪付注文、寺の地位の高さを物語る「後光厳天皇綸旨」や「足利義詮御教書」などからなりますが、寺院の歴史だけでなく、尾張の中世史を語る上でも欠かせない史料です。

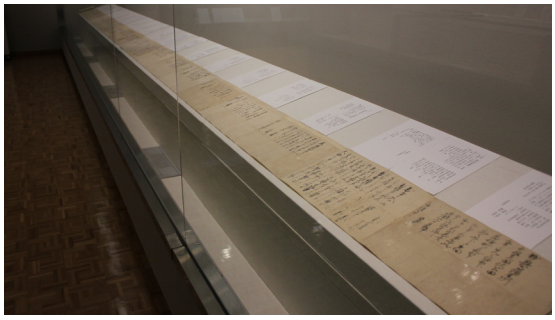
これらの文書群からは、尾張地域の有力国人であった荒尾氏、中島氏からの寄進によって寺領を拡大し、足利将軍家から寺領の安堵などの庇護を受けて、妙興寺が東海地域における中心的寺院として繁栄していく様子をうかがうことができます。

さらに、尾張守護の土岐氏の勢力争い、守護代・織田氏の台頭といった室町末期から戦国期の混乱によって寺領を失いながらも、豊臣秀吉や尾張徳川家の保護を獲得して、再び隆盛を迎える寺院の姿も見て取れます。

加えて、これらの文書が散逸を免れ、現在まで伝わった背景には、歴代住持がその重要性を認識し、古文書整理や写し（重書案）の作成をたびたび行ってきたという事情があり、特筆すべき偉業です。

本展では、全国屈指の質量を誇る「妙興寺文書」を一堂に展示し、中世から戦国期、近世へと至る尾張の歴史を振り返るとともに、これまで妙興寺で行われてきた古文書整理や修史事業にもスポットを当てました。日本史研究の基礎となっている貴重な文書群を間近にご覧いただけたのではと思います。

（学芸員　石黒智教）



企画展「２０２１一宮市現代作家美術秀選展」
令和3年12月4日（土）～12月19日（日）

この展覧会は、第79回一宮市美術展市長賞受賞作品、一宮美術作家協会・一宮書道協会・一宮写真協会推薦者の作品を展示するもので、平成13年（２００１）に始まり、今回で21回目となりました。

今回は、初の試みとして、作品キャプションに出展作家のプロフィールと作品の紹介文、写真撮影の可・不可、ＳＮＳ投稿の可・不可を記載しました。

展覧会直前の11月末、一宮美術作家協会元会長・尾西美術協会会長の三輪清弘先生ご逝去の報に接し、展覧会には生前ご準備されていた作品を展示しました。これまでのご厚情に深く感謝するとともに、心よりお悔やみ申し上げます。

（学芸員　成河端子）

企画展「くらしの道具～ハレの日いろいろ～」

令和4年1月15日（土）～3月13日（日）

毎年1月から3月にかけて開催している企画展「くらしの道具」を今年度も開催しました。平成3年度から行っていた一宮市内の小学校全42校の3年生の団体見学が、昨年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、ビデオ会議システムを利用したオンライン見学に変更となりました。今年度は、昨年度のように全ての学校とオンライン授業を行うのではなく、学校側にオンライン授業か来館を選択してもらいました。

オンライン授業を希望した小学校には、昨年と同じく19の中学校区に分けて授業を行いました。事前に昨年度作成した常設展示の紹介映像を見てもらい、授業当日は電気・ガスのなかった時代に使われていた生活道具の実物を展示室で映像に映し、動作を交えながら道具の使い方などを解説しました。

子どもたちからは、「井戸はどうやって掘るの」「氷冷蔵庫の氷が中で溶けたらどうなるの」「炭火アイロンの重さはどのくらい」など昔の道具についての質問のほか、常設展示室の資料や博物館などについてもたくさんの質問が出ました。

昨年度はオンラインでの授業が初めてであったため、映像が映らないなどのさまざまなトラブルがありましたが、今年度は大きなトラブルもなく、時間いっぱい授業を行うことができました。

来館した学校の子どもたちには、館内を一緒に巡りながら一宮市の歴史について説明しました。昔の道具の展示室では、実際の資料を前に仕組みや工夫などについて説明しました。どの子も興味津々に一生懸命話を聞いて、たんけんブックに書き込んでいました。

昔の道具に加え、今回は「ハレの日いろいろ」をテーマに、誕生や成長、婚礼など節目の行事（人生儀礼）とお正月や七夕などの季節ごとに行う行事（年中行事）を色とりどりの晴れ着や道具などで紹介しました。期間中は親子連れをはじめ、幅広い年齢層の方々にご来館いただきました。

関連イベント「昔の道具をさわってみよう」では、炭火アイロンや薬研、石臼などの道具を触ってもらい、重さや使い方などを知ってもらいました。参加した子どもたちはもちろんのこと、一緒に話を聞いていた保護者の方も驚いたり懐かしがっていただく場面がありました。

今後も子どもたちをはじめ、多くの年齢層の方に昔のくらしや道具に興味を持ってもらえるような展示ができるよう、工夫していきたいと思います。

（学芸員　吉川ひとみ）

「ハレの日いろいろ」の展示コーナー

昔の道具の展示室

オンライン授業の様子

イベント「昔の道具をさわってみよう」

特集展示コーナー

2階の常設展示室の一画を「特集展示コーナー」とし、博物館に所蔵あるいは寄託されている美術工芸品を中心に様々なテーマで紹介しました。

●「山喜多二郎太　自由な墨絵の世界」
前期4月6日～4月29日　後期5月1日～5月30日
山喜多は洋画家でありながら、中国を旅して水墨を学び、自由な筆づかいで温かみのある風景画を描きました。当館に隣接する妙興寺仏殿の龍の天井画も手がけており、その下絵と墨絵による作品を紹介しました。来場者に天井画の見学もご案内しました。

●「藤原コレクション　記念コインで世界旅行」
6月1日～8月29日
コイン収集家から寄贈された多数のコインの中から、それぞれの国を象徴するようなモノや場所、人などがあしらわれたものを展示しました。

●「生誕110年　三枝惣太郎　彫刻と絵画」
8月31日～10月17日
彫刻家の三枝惣太郎（1911～2006）は、香川県に生まれ、美術学校を出た後、教諭をしながら日展などで活躍しました。晩年は一宮市に住み、市美術展の審査員を務めました。本展では遺族から寄贈された彫刻の小品や絵画を、特集展示コーナーのほか1階ギャラリーや小展示室に展示しました。

●「山本梅逸　花鳥の美」
前期10月19日～11月7日　後期11月9日～11月28日
尾張藩で御用絵師となった山本梅逸（1783～1856）による〈四季花鳥図〉15点を前期と後期に分けて紹介しました。

●「墨コレクション　舶来の布の装い」
11月30日～令和4年2月13日
毛織物のコレクションの中からとくに、舶来の布を様々に用いて洒脱なデザインで作られた陣羽織の他、煙草入れや紙入れなどの小物を紹介しました。

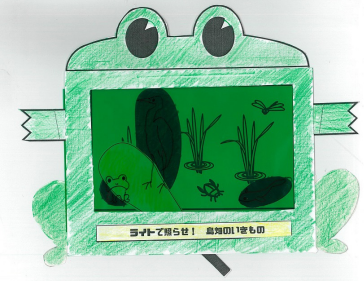
●「尾張の洋画　佐分眞」2月15日～4月10日
一宮市ゆかりの洋画家・佐分眞（1898～1936）が、フランス滞在時に描いた人物画や風景画を書簡とともに紹介しました。

山喜多二郎太　自由な墨絵の世界

墨コレクション　舶来の布の装い

たいけんの森

毎週土曜・日曜・祝日（夏休み期間中は毎日）に開催している体験コーナーです。
4月から5月は、特集展示に関連し、「とびだせ！山喜多二郎太・龍の天井画」と題して、妙興寺仏殿の天井画をモチーフに、開くと龍が飛び出るカードを作りました。
6月から7月は、「ライトで照らせ！島畑のいきもの」と題し、常設展示で再現している島畑の生き物を観察できるような工作をしました。
8月から10月初めは、「土器のうちわ」と題し、開くと壺の写真（原型：三枚惣太郎作「縄文の壺」）が現れるうちわを作りました。
10月から11月は、特集展示「山本梅逸　花鳥の美」に関連し、「花鳥画で扇子」と題して、梅逸の作品の図版や和風の色紙をあしらった扇子を作りました。
12月から1月は、弥生時代のパレススタイル土器のキャラクターで福笑いを楽しむ「どきどきちゃん福笑い」を作りました。
2月から3月は、企画展「くらしの道具」に関連して、昔の道具の写真をそろえて楽しむ「そうかな？パズルBOX」を作りました。
尾張もめん伝承会のボランティアによる週末の「はたおり・糸つむぎ」体験は、新型コロナウイルスの感染状況を見ながら実演見学を実施しました。



ライトで照らせ！島畑のいきもの

そうかな？パズルBOX

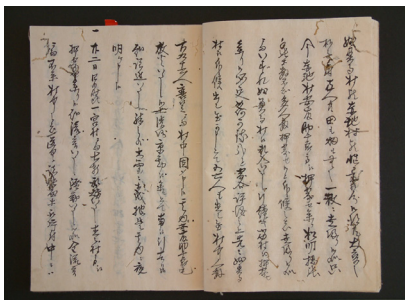
キッズクラブ

新規の応募者3名を加えて全11名の会員に、毎回メールにて案内を送り、実施しました。
初回の6月27日は、企画展「筧忠治」を、ワークシートを記入しながら見学しました。最後に気に入った絵をスケッチして、ワークシートを綴じる表紙にしました。7月18日は、絵本「よこいしょういちさん」のお話を紙芝居で見た後、特別展示で横井さんが実際にグアムで使っていた道具などを見学し、その生涯や戦争の悲しさについて思いを巡らせました。8月は特集展示で世界各国のコインの見学を予定していましたが、緊急事態宣言の発令により中止となりました。10月24日は、特集展示で山本梅逸の花鳥画を、細かく描きこまれた植物や虫の表現や隠された意味に注目してじっくりと見学しました。12月19日は、出品者の長谷川厚一郎氏を講師に、好きな絵等を探しながら企画展「一宮市現代作家美術秀選展」を楽しく見学しました。

古文書講座「古文書にしたしむ」

今年度で30回目を迎えましたが、昨年度に引き続きコロナ禍での開催となりました。5月・6月・9月は緊急事態宣言の発令等を受けて中止とし、2月はまん延防止等重点措置と新型コロナウイルスの感染急拡大を受けて中止しました。

今年度は昨年度に引き続き中島郡苅安賀村（一宮市大和町苅安賀）の豪商関戸家所蔵の史料より明治2年（1869）の「土民蜂起日記」を読み進めました。コロナ禍において、どうしたら受講者が安心、安全に受講できるようになるか考えていく必要があります。



「土民蜂起日記」

博物館実習

8月3日（火）から8月7日（土）までの5日間、愛知県立大学2名、名古屋芸術大学1名、岐阜女子大学1名、駒澤大学1名、愛知淑徳大学1名の計6名（定員6名）の学生が、学芸員資格の取得に必要な実習を行いました。

パネル等の展示実習

最初は館内の設備や主な活動、組織などについてレクチャーを受け、その後、掛け軸や茶箱の取り扱いのほか、民俗資料や古文書の整理、絵画や解説パネルの壁面への展示などの実習を行いました。また期間中、常設展示あるいは開催中の特集展示に関する子供向けワークシートを各自作成することを課題とし、実習の合間の時間帯に準備してもらいました。最終日に発表してもらいましたが、いずれも工夫の感じられる内容でした。展示物や来館者についてよく考えてもらう良い機会になったと思います。

市民文化財めぐり

文化財は、私たちの過去の歴史や遠い祖先の生活を身近なものとして感じさせてくれる貴重な文化遺産です。一宮市では昭和42年以来、市民の方に文化財をご覧いただく市民文化財めぐりを実施しています。今年度は、11月11日（木）に、県指定文化財（史跡）浅井古墳群（5基）を中心に約2キロメートルのコースを歩いて巡りました。

寿福寺本堂の見学

見学コースは以下の通りです。

小塞（おぜき）神社社叢（しゃそう）（市指定・植物）・小塞神社古墳→寿福寺本堂（市指定・建造物）→桃塚古墳→岩塚古墳→毛無塚（けなしづか）古墳→石刀神社（黒岩祇園祭（市指定・無形民俗文化財））

文化財防火デー関連行事

昭和24年1月26日に法隆寺金堂壁画が焼損したことから、この日は「文化財防火デー」に定められています。博物館では毎年、文化財防火デーの関連行事として、消防本部とともに文化財防火訓練と文化財防火パトロールを実施しています。

文化財防火パトロール

文化財防火訓練は、同日、真清田神社境内において実施する予定でしたが、新型コロナウイルスの急激な感染拡大を受け、中止しました。

文化財防火パトロールは2月10日（木）に実施し、文化財が所在する4カ所で防火指導や防火用設備等の点検指導等を実施しました。

展覧会への所蔵資料の貸し出し

●あいち朝日遺跡ミュージアム　企画展「パレス・スタイル―赤の土器―」（4月24日～6月27日）に、山中遺跡・八王子遺跡・北道手遺跡出土品16点と山中遺跡土器集合写真1点

●滋賀県立安土城考古博物館　秋季特別展「黎明―東西文化が共生した先史時代の近江―」（10月9日～11月21日まで）に、八王子遺跡出土土器2点

●稲沢市荻須記念美術館ほか　「生誕120年記念荻須高徳―私のパリ、パリの私―」（9月10日～令和4年3月13日）に、荻須高徳作〈カ・ドーロ（ヴェネツィア）〉

●みよし市立歴史民俗資料館　秋季特別展「伊豆原麻谷と小島老鉄～交錯する二人の南画家～」（10月9日～12月5日）に、小島老鉄作〈羅漢図〉

●茨城県立歴史館　特別展「華麗なる明治―宮廷文化のエッセンス―」（令和4年2月19日～4月10日）に、明治天皇着用のフロックコート・シルクハット、岡玄卿着用の宮内高等官大礼服（勅任官）

登録有形文化財（建造物）の新登録

瑞芳院本堂及び庫裡　1棟

登録有形文化財は、平成8年（1996）の文化財保護法改正により導入された制度です。建造物の分野で登録の対象となるのは、築後50年を経過し、①国土の歴史的景観に寄与しているもの、②造形の規範となっているもの、③再現することが容易でないもの、のいずれかの基準に該当する建造物となります。

このたび、一宮市中町に所在する瑞芳院本堂及び庫裡について、①に該当するとして、令和3年7月16日、国の文化審議会により登録有形文化財（建造物）に登録するよう文部科学大臣に答申がなされ、同年10月14日に文化財登録原簿に登録されました。

瑞芳院は妙興寺（一宮市大和町）の塔頭として開かれ、当該建物は文化10年（1813）に妙興寺境内に建てられました。明治24年（1891）発生の濃尾地震の被災を経て、大正4年（1915）に現在地へ移築され、現在に至ります。

本堂は方丈形式で、桁行北側に庫裏が連なります。切妻造桟瓦葺で妻飾りを木連格子と懸魚とし、四周に下屋を巡らします。内陣は小組格天井で正面に筬欄間を構え、須弥壇に花頭口を並べます。建築面積は182平方メートルです。

これにより、市内の指定・登録等文化財の件数は、国指定18件（国選定を含む）、県指定34件、市指定249件、国登録24件（建造物・名勝地関係を含む）、合計325件となりました。

外観（南面）

内観（内陣）

外観（東面）

史料紹介

「御巡見御触留記」

墨家文書

当館所蔵文書の中に「墨家文書」という家文書があります。この家文書は、平成二十五年度（二〇一三）に木曽川町の墨家より寄贈されました。家文書の大半は書籍で占められています。

墨家は江戸時代後期に、北方代官所支配の村々で、もめごと、争いごとの仲介人「取噯人」として、日夜奔走した墨八百八秋隆の生家です。墨八百八は、寛政二年（一七九〇）に尾張国葉栗郡玉ノ井村西屋敷（現・一宮市木曽川町玉ノ井）の村方頭百姓・墨林左衛門の三男として生まれましたが、林左衛門の兄八百八に嗣子がいなかったため養子となり、八百八秋隆を名乗ります。幼少の頃に黒田村の剣光寺の住職に学問を学び、その後、本居春庭（本居宣長の実子）に国学を、笠松の角田錦江に漢学・詩文の手ほどきを受け、教養を高めたといいます。

文化六年（一八〇九）に二十歳にして、北方代官所支配所の公事出入取噯人（調停人）となり、文久三年（一八六三）に退役するまでの五十年以上にわたり、紛争当事者の間に入って約千件のもめごと、争いごとを解決してきました。

筆まめであった八百八は、自ら問題解決した記録を『取噯留』として五冊にわたり書き留めています。また亡くなる前年の慶応二年（一八六六）八月まで、自身の事だけでなく、村方、政治関係あるいは風聞など約三百五十件を『記録』として三冊残しています（現在は二冊散逸し、天保二年（一八三一）から嘉永三年（一八五〇）までの一冊現存）。

さて墨家文書は、愛知県史編さん事業において整理、目録作成が行われました。しかし、簡易目録であり、特に書籍については書誌情報が不足しているため、現在、書籍を中心に再整理を進めています。その再整理の中で新たな発見もありましたので、紹介します。

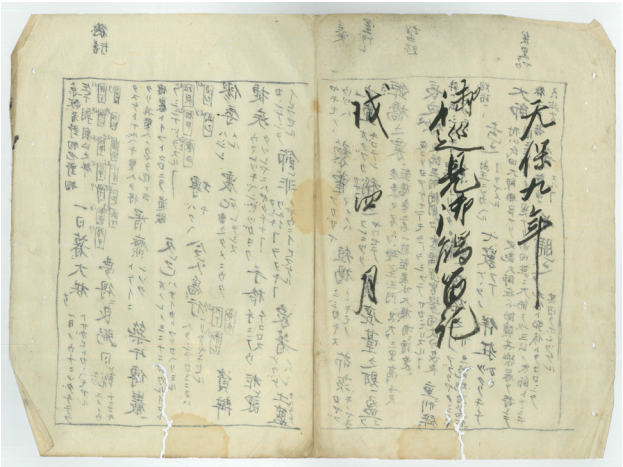
御巡見御触留記

今回紹介する「御巡見御触留記」は『十八史略』の用語解説を書写した写本の紙背（紙の裏側）に書かれていました。袋綴じの冊子で、紙縒りで簡易に綴じられていたため、綴じを外したところ、天保九年（一八三八）の「御巡見御触留記」を発見しました。このような使用済の反故紙を再利用している文書で、先に書かれた面の文書のことを紙背文書といいます。この場合、天保九年の「御巡見御触留記」が先に書かれているため、こちらの記録を紙背文書と呼びます。

文書の書き手は墨八百八秋隆です。『十八史略』の書写は二代目墨八百八と考えられます。『十八史略』の書写年代は明治十六年（一八八三）頃と考えられ、明治になって、これまでの幕府関係の文書は不用になると二代目墨八百八は思ったのかも知れません。破棄されずに紙背文書として再利用されたことで、当地の巡見使受け入れの一端を垣間見る貴重な文書が残され、大変幸運なことだったといえます。

さて、巡見とは、一般的に将軍の代替わりに幕府から諸国に巡見使を派遣し、諸国の情勢を把握することにあります。この制度が慣例となったのは、五代綱吉から十二代家慶の代までです。それ以前の三代家光・四代家綱の代は代替わりに伴うものではなく、他の政策遂行上の理由によって実施されました。桜井芳昭（注1）によれば、尾張・三河への巡見使派遣は四代家綱から十二代家慶まで八回あったとされています。

「御巡見御触留記」に記録されている巡見は、このうちの天保八年十二月、十二代将軍家慶（在職：一八三七～五三）の将軍に着任に伴うものです。この時の巡見に関する史料は、『くさの井史』（注2）や『江南市史』（注3）に掲載のもの、江南市歴史民俗資料館保管の「公義御巡見諸事留帳」（注4）などが知られています。「御巡見御触留記」とその他の史料から天保九年の巡見の様子の一部を見てみましょう。



「御巡見御触留記」表紙

【写真①】

前飛保村
御巡見衆之内　曼陀羅寺本坊二而御休
　土屋一左衛門様　亭主　宮田村　瀬之助
同　慈光院二而御休
　設楽甚十郎様　亭主　村久野村　半三郎
同　霊鷲院二而御休
　水野藤次郎様　亭主　鹿之子島村須賀荻三郎
北方御代官
　本杉為三郎様　其外御配下方　寛立院二而御泊リ宿
御勘定御吟味役　福田林左衛門様　谷川五郎右衛門様　支配勘定与頭　常照院二而御休
　宮本庄次郎様
　御巡見衆之内
　設楽甚十郎様御家来下宿　清涼院（注5）
御巡見之内
　水野藤次郎様御家来下宿　光明院
小牧御代官
　河原一太郎様御宿
　料理部屋本〆方

「御巡見御触留記」写真①

【写真②】

御巡見飛保村御昼休二付庄屋与頭亭主役江御請書
曼陀羅寺本坊之亭主宮田村栗本千七（ママ）・慈光院亭主
村久野村弥七・霊鷲院亭主鹿子島村須加（ママ）萩三郎也
　但、右之輩の内、病気等二而倅を名代二出候願も有之共、一躰ハ前文之三人也
右之外、宮田村栗本勝四郎右三人之差支有之節之代り人二申談、其外代り人陣屋（江ヒ）御心組いたし置也
　前飛保村
　庄屋
　組頭
　同村昼休二而
　亭主役之者
右、今般巡見之輩通行二付、先達而已来品々演達及ひ置候趣、其外申談置候趣共、左二書付を以申渡候間篤と致承知、難相分儀も候ハヽ早々陣屋江罷出可相伺候
一　巡見之輩三人二付、休宿三軒手当之事
　壱人分之家来侍分等之席分いたし、其主人之休宿江上下とも入込候積手当之事
　北方御代官休宿
　手附一同入込
　家来とも入込
　御勘定吟味役休宿
　家来とも入込

【写真③】

一　御代官様御吟味役様ハ　本杉為三郎様御宿　板の上に奉書之紙を張書、門之見付柱二かけ候也
一　支配勘定組頭衆ハ　福田林左衛門様　谷川五郎右衛門様　奉書紙に認へし門に張下ケ候也
一　設楽甚十郎様御下宿　是ハ御巡見衆下宿の席札奉書二認門にさけ候也
一　御巡見衆御参着半時計已前二御先番御出二付、御席割被成候、尤何歟と不分事問合せ仕候事
一　御巡見衆御坐敷入用之物左之通
　一　本床真中二白木三方、是を御朱印臺と申也
　　是ハ足にすし有之方を壁付にいたし置、合せめの方を外へいたしかざり付て御坐候
　一　大目床の方二熨斗臺塗三方、是ハ足二透し有之候方を外へいたし、合せめの方を壁付にいたし置候也
　　熨斗ハたはね候方を左へ仕、ふさになりたる方を右へ仕置候也、尤三方の上に奉書紙を二枚左右へ半分つヽ下り候様二いたし置候也

「御巡見御触留記」写真②

曼陀羅寺での休息

天保九年三月九日に江戸を発った巡見使一行総勢百二十名は、駿河→遠江→三河→尾張と順に巡ります。出立後三十二日目頃に「尾張国御領分」に参着、その後、伊勢→志摩→伊賀の順に巡見し、出立後の四十六日目頃に「信濃国御領分」に参着する行程で巡見使巡視の触が流されました。四月十二日に春日井郡下原村（現・春日井市）を通った一行は犬山で宿泊し、翌十三日明六ツ（日の出・午前六時頃）に犬山を出立しました。その後、前飛保村（現・江南市前飛保町寺町）の日輪山曼陀羅寺（西山浄土宗）で休憩します。巡見衆の曼陀羅寺における休息は、【写真①～③】に記されたとおりと決められました。

巡見使の三人の休憩場所は、曼陀羅寺本坊や慈光院、霊鷲院といった曼荼羅寺の塔頭が当てられ、それぞれに「亭主」として接待役の村人が定められています。墨八百八が書き留めた「御巡見御触留記」には、「公義御巡見諸事留帳」などの他の史料に記載のない部分もあり、両者で補完することで、巡見使を迎える準備の詳細が分かります。

その一つは、各休息所における宿板の張紙や三方（儀式用の台）の置き方など、巡見使を迎える村が準備した設えの仔細です。巡見使の名前を書いた紙を宿板に貼り所定の場所に掲げ、また白木の三方を朱印台とし、漆塗の三方を熨斗台とし、各三方の飾り方についても図入りで記しています。白木の三方は「足に筋のある方」を壁につけ、「合わせ目の方」を外に向ける、塗りの三方は「足に透かしのある方」を壁につけ、「合わせ目の方」を外に向ける、熨斗は束ねた方を左に、房の方を右に、三方の上に奉書紙を二枚のせ、左右を半分に折って、下がるようにするといったふうに、非常に細々と決められていたことが分かります。こうして他の史料と読み比べることで、墨八百八の筆まめさが良く分かります。

巡見使の一行は、前飛保村を後にすると一宮村（現・一宮市中心部）を経て萩原宿（現・一宮市萩原町）で宿泊、片原一色村（現・稲沢市）を経て美濃路の佐屋宿で宿泊、五之三村川平新田湊（現・愛西市）から桑名へと向かいました。

今回は紙背文書「御巡見御触留記」を紹介しました。博物館にはまだ多くの古文書、書籍（写本等）があります。今後も再整理を進め、新たな発見文書を紹介していきたいと思います。

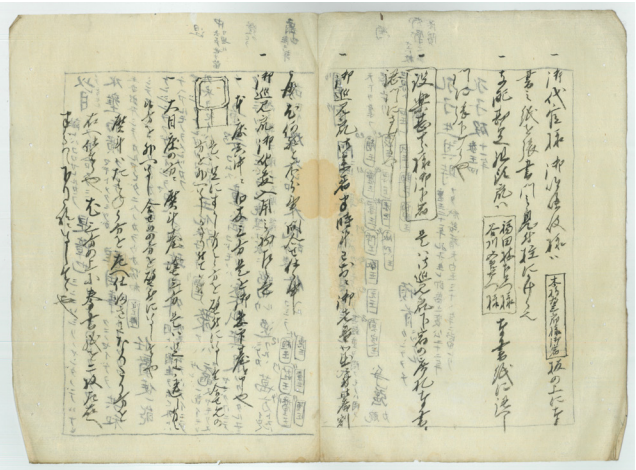
凡例

・読みやすくするため、読点（、）及び並列点（・）を適宜施した。
・改行は原文に従った。
・異体字・略字の類は、正字体に改めた。誤字等はそのままとし、右傍の（　）内にに（ママ）または推定される正字を付した。

注釈

（注1）桜井芳昭「巡見使来訪時における村方の対応について－尾張・三河地域を中心として－」、『地理学報告』六八号、一九八九年。
（注2）「くさの井史　前編」第十五号、二一八～二二一頁、『くさの井史』（くさの井史編纂委員会・江南市立草井小学校後援会編、一九七九年）所収。
（注3）江南市史編纂委員会編『江南市史　資料三　古文書編　上』一九八〇年、一一四～一一六頁。同『江南市史　資料三　古文書編　下』一九八〇年、二〇三～二〇六頁。
（注4）「公義御巡見諸事留帳」は江南市歴史民俗資料館所蔵の澤木誠治編『江南市域巡見基礎史料』（二〇一四年・私家版）所収。本稿の執筆にあたっては、松井雅文氏による翻刻を参照した。
（注5）曼陀羅寺の塔頭に「清涼院」の名は見えず、詳細は不詳である。江南市史編纂委員会編『江南市史資料一　宗教編』一九七五年、二〇〇～二〇九頁。

（学芸員　石黒智教）



「御巡見御触留記」写真③

令和４年度企画展「国登録文化財 葛利毛織工業工場とのこぎり屋根」

令和２年（２０２０）８月17日、一宮市木曽川町玉ノ井字宮前に所在する葛利毛織工業株式会社（以下、「葛利毛織」と略す。）の鋸屋根工場と関連する建物８棟が国の登録有形文化財に登録されました（表１）。昭和７年（１９３２）頃に四巾織機と呼ばれた力織機の導入とともに新設された鋸屋根の建物（鋸屋根工場）は、増築と設備更新が繰り返され、現在も毛織物を中心とした服地の生産が続けられています。

現在の一宮市域を含む尾西地方は、織物産地として長い歴史を有しています。江戸後期には広範な展開を遂げた棉作のもと、手紡の綿糸などを織り上げた縞木綿の生産が盛んでした。幕末の開港による紡績糸の流入や後の国内機械紡績業の発達は、棉作や手紡の衰退を招きます。

葛利毛織工業 工場（北面及び西面）

一方織物業では、均質な紡績糸や絹糸などを交ぜ織りした絹綿交織物が発達しました。

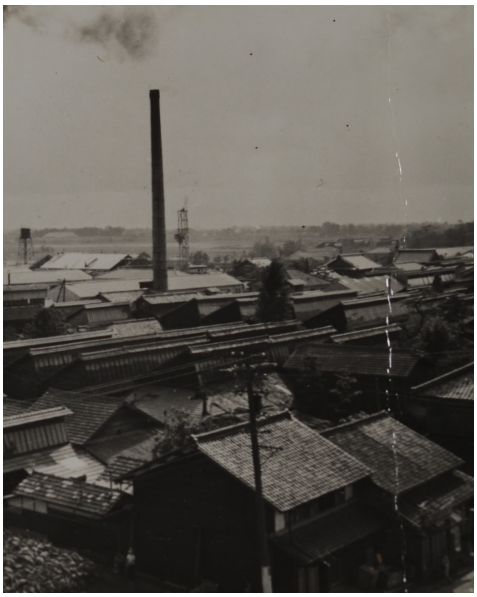
大正期に入ると、需要が見込まれる毛織物への転換が進み、大正後期には毛織物の生産額が織物生産額の過半を占めるに至ります。併せて、織物を生産する織機は、手織機から動力で稼働する力織機に入れ替わり、尾西地方の織物業は近代化を遂げていきました。

建物上部が鋸歯に似た鋸屋根工場が、尾西地方で確認できるのは大正前期で、この頃から織布工場などの建物として、広がり始めたとみられます。機械設備の設置に適した作業空間と場内に外光が行き渡る採光性を有した鋸屋根工場は、毛織物を中心とする繊維産業の隆盛とともに普及します。一宮市域では昭和後期に至るまで数千棟の規模で建てられました。

市橋毛織物工業第1工場（一宮市奥町）内部
木造５連の鋸屋根工場。平成 28 年取り壊し。

博物館では今回の文化財登録を記念し、企画展「国登録文化財 葛利毛織工業工場とのこぎり屋根」を令和４年７月16日(土)から８月14日(日)まで開催します。葛利毛織の建物群や工場での服地生産について紹介するとともに、大正期を中心にこの地方の鋸屋根工場の関係資料（図面・古写真など）を展示します。また本展では、写真家林秀樹氏による市域に残る鋸屋根工場の外観写真や工場で働く人々の写真を展示します。

今回、展覧会の開催に先立ち、葛利毛織の沿革や展示資料の一部について紹介します。



起町の鋸屋根工場群　昭和 30 年以前　一宮市尾西歴史民俗資料館蔵
連数や間口の大きさが異なる様々な鋸屋根工場が建ち並ぶ。

葛利毛織工業の沿革

葛利毛織工業 土蔵　卯兵衛家より曳家したと伝わる。

同 主屋　昭和 24 ～ 25 年に建て替えられたもの。

葛利毛織は、家業の織物業を継いだ葛谷理一が葉栗郡玉ノ井村の現敷地で製織を始めた大正元年（1912）を創業とする。理一は、農業や織物業を営む父の卯兵衛から現敷地にあたる家屋敷の一部を譲り受け、卯兵衛家にあった主屋に手織機を置いて織物業を営んだ。

製品については、卯兵衛は絹綿交織物を織っていたという。その後、大正15年（1926）発行の『帝国実業興信録』広告に、「葛理織布工場 葛谷理一」「絹綿交織（芦邊絣。セル）製造業」、昭和3年（1928）発行『尾州織物案内』広告には「毛織物」「服地／セル絣／其他各種」とあることから、大正末期から昭和初期にかけて、生産する製品の中心が絹綿交織物から毛織物に転換されたことが窺える。その頃の葉栗郡（現在の一宮市北部・江南市北部）は、中島郡（現在の一宮市西・南部・稲沢市付近）や一宮市などで発展した毛織物生産の影響が及び、昭和2年には葉栗郡の織物生産額の首位が絹綿交織物から毛織物及其交織物に入れ替わっている。

同　工場（西面）

同　工場（内部）　稼働する力織機

昭和7年頃、現存する鋸屋根工場が建てられる。聞き取りによると、当初の規模は現在の4連のうち北側2連分で、場内には四巾織機が設置されたという。四巾織機は、着尺地（着物用の生地）のセル（経糸・緯糸に梳毛糸等を用いた薄地織物）などに用いられた二巾織機よりも製織できる生地の幅が広く、服地の製織に適していた。葛利毛織は四巾織機の導入で服地生産を本格化したとみられ、昭和10年代にはサージ（斜文組織で綾目が鮮明な梳毛織物）などを生産している。戦時中は陸軍の軍服を生産したというが、終戦後は現在に至るまで、梳毛織物を中心とした毛織物などの服地生産を続けている。工場は昭和20年（1945）か21年に南側2連が増築され、昭和30年代には敷地形状に合わせて東西とも間口方向に増築がなされた。

表1　葛利毛織工業株式会社の文化財

文化財種類：登録有形文化財（建造物）　種別：産業2次　登録：令和2年8月17日			
名　称	員数	建設年代等	構造、形式及び大きさ
葛利毛織工業株式会社工場	1棟	昭和7年頃 昭和20年頃・同30年代増築	木造平屋建、瓦葺 建築面積563㎡
同　事務所	1棟	昭和7年頃	木造2階建、瓦葺 建築面積55㎡
同　主屋	1棟	昭和24年頃	木造2階建、瓦葺 建築面積186㎡
同　離れ	1棟	昭和7年頃 昭和25年頃・同50年頃増築	木造2階建、瓦葺 建築面積97㎡
同　男子寮	1棟	昭和27年頃 昭和32年頃増築	木造2階建、瓦葺 建築面積43㎡
同　旧浴場及び便所	1棟	昭和30年頃 昭和30年代増築	木造平屋建、瓦葺 建築面積34㎡
同　土蔵	1棟	江戸末期	土蔵造2階建、瓦葺 建築面積55㎡
同　原糸倉庫	1棟	昭和23年頃	木造平屋建、瓦葺 建築面積56㎡
同　倉庫	1棟	昭和32年頃	木造平屋建、瓦葺 建築面積52㎡

凡例：表のデータは、国指定文化財等データベース登載データに拠る。

展示資料紹介

【資料①】鈴鎌織物工場　棟上げ式写真
同　外観写真（パネル展示）

資料①-1　台紙 32.3×40.1 cm　写真 20.8×26.6 cm
大正時代　館蔵

鈴鎌織物（当初は鈴木織物、後に鈴鎌毛織（物）に改称。）は市内三条にあった織布工場で、明治11年（1878）に鈴木鎌次郎が創業し、高機とされる手織機で織物業を始めた。明治24年の濃尾地震では工場に甚大な被害を受けるも、翌年工場を建築しこれを機にバッタン機を導入する。

大正5年（1916）、電力の供給を受け力織機での操業を開始する。また同年「織機の必要を見認め鋸形数十坪の工場を建設」（第2代鈴木鎌次郎記録）したともある。別の資料には、大正4年に「工場を新式に一大改築し同時に」英国製力織機を導入した（尾西織物同業組合弐拾周年記念誌広告）ともあるので、大正4、5年に鋸屋根の建物を建て、大正5年に力織機での操業を開始したのであろう。

資料①はともに鈴木家の旧蔵で、①―1は大正の工場建築時の棟上げ式写真、①―2は大正期の外観写真とされる。

大正期、工場内には英国製四巾織機、国産（平岩鉄工所製・天満小森鉄工所製）の四巾・二巾織機があった。鈴鎌では、明治31年（1898）に初めて毛糸を使った製品（経糸綿・緯糸毛の浴衣地）を作り、後に絹綿交織物から毛織物の製造に転じた。

資料①-2　プリント 29.2×40.4 cm
撮影：大正時代　館蔵
工場敷地を南西から撮影。聞き取りによると、写真右端の2階建は寄宿舎、写真中央の縦板の塀に囲まれた場所は煙突を備えた染色工場だった。

敷地内には東西2棟の木造鋸屋根工場（東工場3連・西工場7連（資料①―2））が建ち、昭和初期には百台ほどの力織機を稼働させていた。しかし昭和8年（1933）5月火災に遭い、工場は寄宿舎と蔵を除いて全焼した。

翌9年、規模を縮小するも、再築した工場（3連の木造鋸屋根工場）に四巾織機十数台を設置し、操業を再開する。戦時統制期、三条周辺の織布工場は三条毛織有限会社に統轄されるが、鈴鎌はその事務所を兼ねた一工場となる。昭和18年、軍に織物会社か軍需工場かどちらかの下請けとなるよう命じられたといい、航空機部品メーカーの岡本工業株式会社の下請けとなる。航空機車輪の部品等の製造を担ったという。当時の工場の機械配置図には、織機はなく、ボール盤・フライス盤・旋盤等の工作機械が描かれる。

戦後は、昭和23年頃に製織を再開し、平成6年（1994）の廃業まで、毛織物の製織を続けた。

【資料②】吉田織産合資会社工場　外観写真（パネル展示）

資料②（原資料未確認）
撮影：大正時代　萬松山頓聴寺（小信中島）蔵
写真提供：一宮市三岸節子記念美術館
工場敷地を南東から撮影。写真右端の2階建は事務所、中央の建物は用途不明。中央の建物は後に壊され、左の3連の鋸屋根工場（織布工場）が北方向に9連まで増築された。

小信中島にあった織布工場。明治末頃の創業で、当初は着尺地のセルを生産していたが、先駆的に服地の製織ができる四巾力織機を買い入れ、洋服用サージの大量生産を行った。

写真に写る3連の鋸屋根工場は、後に増築がなされ9連となる。9連のうち7連が煉瓦造で、残り2連は木造とみられる。煉瓦造の鋸屋根工場は、国内最初期の鋸屋根工場である大阪紡績三軒屋工場を始め明治・大正期の大規模工場などに見られるが、市域では珍し

い。

吉田織産は、画家三岸節子の生家の工場でもあった。父の吉田永三郎が代表を務め、兄の吉田章義が経営を行った。第一次世界大戦中の大戦景気で業績を伸ばすも、大正9年（1920）の戦後恐慌で損失を出し、後に破産した。外壁を煉瓦タイルで仕上げ、建物上部に天窓を用いる現在の三岸節子記念美術館の建物は、吉田織産工場をモチーフとする。

【資料③】　工場繁栄（尾張一宮名勝図絵）

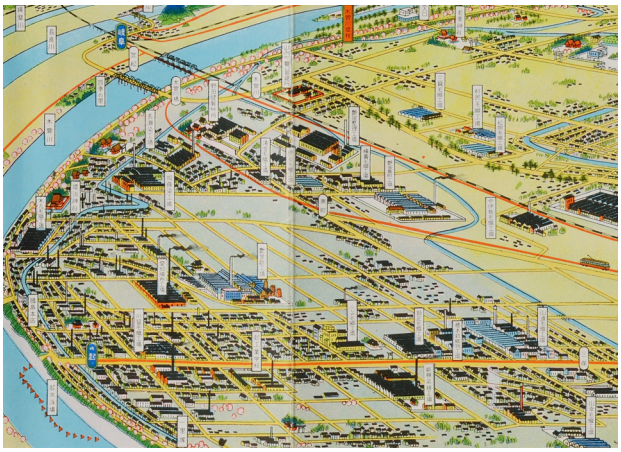
資料③　26.2 × 37.7 cm　画面 24.4 × 36.2 cm
一宮観光協会発行　名取春仙：原画
昭和8年（1933）　館蔵

一宮観光協会の設立記念事業として制作された尾張一宮名勝図絵6枚のうち1枚。真清田神社・桃花祭・三八市に続く第四景として一宮市の工業景観を描く。

街は、鋸屋根工場などの工場建築や煤煙を吐きながら林立する煙突にあふれる。画面手前中央には、天日干しされた有色の絽糸が見える。染色工場であろうか。

この作品が発行された昭和8年（1933）当時、愛知県内の毛織物生産額は全国生産額の約半数を占めた。うち一宮市と中島郡の合計生産額は県内生産額の55パーセントを占めた。また一宮市と中島郡の毛織物の織布工場（他織物との兼営を含む）数は県全体の56パーセントを占めた。

【資料④】　産業と観光の尾西地方　毛織之津島（写真は部分）



資料④　鳥瞰図：17.8 × 77.5 cm　表紙：18.9 × 23.5 cm
一宮市役所・一宮商工会議所発行　内題「産業と観光の尾西地方」
吉田初三郎：原画　昭和12年（1937）発行　館蔵

吉田初三郎原画による鳥瞰図。横に細長い画面には、中央に一宮市、左側に現在の市域西部、右側に海部郡津島町などが描かれる。町並みが続く葉栗郡木曽川町、中島郡奥町、同郡起町周辺（資料④写真）には、織布、染色、整理などの繊維関連工場が集積し、毛織物を中心とした織物生産を支えた。写真下部の赤い線が引かれた左右（東西）の道路は、一宮市・起町間を結ぶ府県道一宮大垣線で、大正13年（1924）から昭和28年（1953）まで路面電車（名古屋鉄道蘇東線のち起線）も走った。

（学芸員　岩井章真）

主な参考文献

【12・13頁分】川崎敏「産業革命期の尾西機業地域」（『歴史地理学紀要』第6巻、1964年）、小野雅信・岩井章真・野口英一朗「尾西地方の鋸屋根工場の一次調査 その1」（『産業遺産研究』第18号、2011年）、岩井章真・天野武弘・野口英一朗・磯部恭子・小野雅信「一宮市木曽川町玉ノ井の毛織物工場 その1 葛利毛織工業の沿革と機械」（『産業遺産研究』第24号、2017年）、中島茂「尾西地方における織物工業地域の近代化と織物工場主」（『愛知県立大学日本文化学部論集』第10号、2019年）、野口英一朗「葛利毛織工業株式会社の建物について」（2019年）

【資料①】「第2代鈴木鎌次郎記録の大正12年日記」（衣の民俗館編、「尾西の産業構造資料展」、1994年）、廣瀬長雄編『尾西織物同業組合弐拾周年記念誌』（尾西織物同業組合、1924年）、森徳一郎編『尾西織物史』（尾西織物同業組合、1939年）、「続・鈴鎌毛織資料目録 戦時・統制期」（1993年）、横川公子「戦時統制期の鈴鎌毛織工場関連資料とその目録（一）生産・流通関係資料を中心に」（『民俗と風俗』第20号、2010年）、聞き手 水野信太郎他、テープ起こし 浅野伸一「インタビュー「私の歩んだ道」尾西毛織物業の栄光と衰退の体験を語り伝えて 鈴木貴詞さん」（『産業遺産研究』第20号、2013年）

【資料②】岩井章真・野口英一朗「尾西地方にあった煉瓦造の鋸屋根工場 吉田織産合資会社工場」（『産業遺産研究』第26号、2019年）

【資料③】愛知県経済部商工課『愛知県の毛織物状況』（1935年）

本稿（資料①）の執筆に際し、資料をご寄贈いただいた鈴木貴詞氏より聞き取りを行った。また中部産業遺産研究会会員の浅野伸一氏には資料の提供を受けた。記して謝意を示したい。

展覧会・催し物

所蔵品による企画展
川合玉堂とゆかりの画家たち
6月4日（土）～6月26日（日）

企画展
国登録文化財
葛利毛織工業工場とのこぎり屋根
7月16日（土）～8月14日（日）

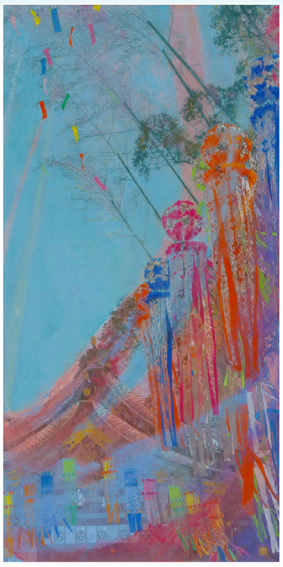
催し物
博物館で夏祭り！秋祭り！
7月16日（土）～10月10日（月・祝）

特別展
西田眞人　一の宮を描く
10月15日（土）～11月27日（日）

企画展
いちのみやアートアニュアル２０２２
12月3日（土）～18日（日）

企画展
くらしの道具 これな～んだ？
令和5年1月14日（土）～2月19日（日）

企画展
没後50年 郷土史家 森徳一郎
浅野研究から一宮市史へ
2月25日（土）～3月26日（日）



西田眞人<七夕>
（真清田神社）
2016年、敬愛まちづくり財団蔵

特集展示コーナー

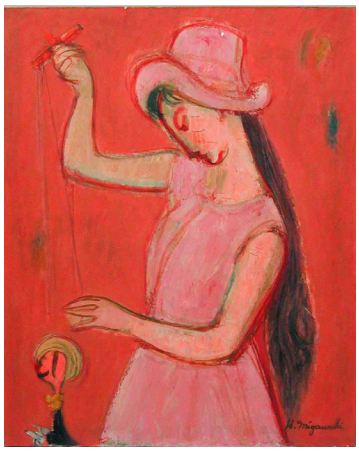
尾張の洋画　生誕１２０年　宮脇晴
4月12日（火）～7月3日（日）

土鈴いろいろ
7月5日（火）～10月10日（月・祝）

名僧の墨蹟
10月15日（土）～12月18日（日）

生誕１００年 郷土の俳人 小川双々子
12月20日（火）～2月12日（日）

墨コレクション　洋装いろいろ
2月14日（火）～4月9日（日）



宮脇晴 <赤のあやつり>

たいけんの森・わくわく体験

一宮市と私の１００年すごろく
4月2日（土）～5月29日（日）

紙の銅鐸づくり
6月4日（土）～7月31日（日）

つなげてドキドキ絵本
8月6日（土）～9月25日（日）

小さな絵の展覧会
10月1日（土）～11月27日（日）

ふわふわうさぎの絵馬
12月3日（土）～1月29日（日）

ふしぎなギザギザ絵
2月4日（土）～3月26日（日）

博物館キッズクラブ 新規会員の募集！

学芸員といっしょに博物館に展示してある様々な資料を見て、楽しみながら学びます。
▼対象／小学校3年生～中学生
▼定員／20名（抽選）
▼申込／4月末までに（定員に満たない場合は随時募集）はがき又はＦＡＸに名前・学校名・学年・住所・電話番号・保護者名・メールアドレス又はＦＡＸ番号を記入の上、「博物館キッズクラブ」係まで。「いちのみや子育て支援サイトアプリ」からも申し込み可。

博物館常設展示年間観覧券

常設展示（特集展示や常設展と同額の企画展を含む）を、ご購入から1年間、何度でもご覧いただけるお得な観覧券です。ぜひご利用ください！

一宮市博物館だより
第６５号

発行日／令和４年３月31日
編集・発行／一宮市博物館
印刷／モリ印刷株式会社
※過去の博物館だよりは、館 Website でご覧いただけます。

一宮市博物館
愛知県一宮市大和町妙興寺 2390
電　話 0586-46-3215
ＦＡＸ 0586-46-3216
URL　https://www.icm-jp.com/